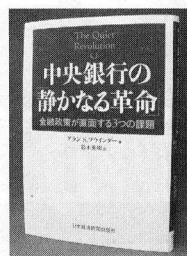


## 『中央銀行の「静かなる革命」』



『中央銀行の静かなる革命』  
Alan S. Blinder 著・鈴木英明 訳  
日本経済新聞出版社刊  
/2,100円 (税込)

米国金融の動揺が続いている。サブプライム問題に端を発した金融不安は住宅公社の経営危機へと発展し、アメリカの金融政策運営は危機対応に大きく舵を切っている。

本書は、その米国連邦準備制度の副議長を務めたプリンストン大教授による中央銀行制度に関する講演録である。原著の発行から四年が経過しているが、その重要性は変わっていない。

著者の議論は、よりよい金融政策を目指す熱意にあふれており、その基本論点は明快である。第一に、中央銀行の政策運営は、以前の秘密重視のスタイルから透明性の高いものへと基本的に変化し、政策決定の過程が詳細に公表されるようになった。第二に、中央銀行における意思決定は個人ではなく委員会、つまり

グループによる決定に委ねられるべきである。第三に、中央銀行は金融市場から情報を得ることは重要だが、市場はときに誤った判断を下す強力な群衆となるため、その短期的な振れに惑わされるべきではない。

これらの簡潔なメッセージに共感する専門家や中央銀行関係者は少なくないだろう。とくに第一の透明性向上は、最も顕著な「静かなる革命」であり、事実日本でも新日銀法が施行され、政策運営の透明性は格段に向上した。

本書は、中長期的な政策の透明性や現下の金融不安を考える上でも有益である。日米の経験が示すように、金融緩和が長引くと、資産価格バブルと崩壊、その後の金融不安・景気後退へとつながるリスクは軽視できない。経済の中長期的な安定を、透明性を確保しつついかに達成するか。その重要課題を考える手がかりともなる良書である。

(評者・神戸大学経済経営研究所長 宮尾龍蔵)

## 『市場リスク 暴落は必然か』



『市場リスク 暴落は必然か』  
Richard Bookstaber 著・遠藤真 訳  
日経BP社刊  
/2,520円 (税込)

高度に洗練された金融市場において、危機はなぜ繰り返されるのだろうか。金融商品の多様化、リスク管理の高度化、売買執行の高速化といった技術進歩は、むしろ危機の頻度と深刻度を増す方向に働いているのではないか。

本書は、学者からトレーダーに転じた後、大手投資銀行やヘッジファンドでリスク・マネジメント責任者を務めた著者(評者の元同僚)が、そのユニークな経験に基づいてこれらの問題を論じた力作である。前半は「現場」を二〇年間みてきた著者の臨場感あふれる回想記となっている。

気の利いたコメントや理論的解説が適宜加えられて読者の理解を深めるようになっており、たんなる内幕物ではけっしてない。

後半ではファイナンス理論

だけでなく自然科学や経済史の知見も援用しながら、金融市場の安定性や流動性に関する洞察に富む議論が展開される。厳密な理論や実証分析に基づいているわけではないが、市場リスクをより深く理解したいと思う人々にとって有益なヒントとなりうるだろう。金融革新の副作用ばかりが強調されている点には疑問もあるが、過度な複雑化を戒める警告には評者も基本的に同感である。

個人的には、巨大金融コングロマリットの非効率性を描いた部分が印象的であった。権力闘争に膨大なエネルギーが費やされる一方で、意思決定のスピードもクオリティも大幅に劣化していく様子は、日本の金融機関にとっても他人事ではないはずだ。

翻訳はおおむね読みやすいが、一五〇万ドルが一億五〇〇万ドル(一五一ページ)と訳されているなど、明らかな誤訳が散見されるのは残念である。

(評者・早稲田大学教授 四塚利樹)